平成２８年１１月６日（日）

老球の細道２８１号

１０月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

先月末に開幕した日本バスケットボールのトップリーグ「Ｂ　ＬＥＡＧＵＥ」に間接的に携われたことが今月のトピックだった。大河チェアマンが発したＢリーグのスローガン「Ｂｒｅａｋ　ｔｈｅ　Ｂｏｒｄｅｒ」は「前例を笑え」「常識をこわせ」「限界を越えろ」の思いが込められているという。今月はこのように激しく生きようと思ったら、今度は目の飛蚊症になりトーンダウン。華麗に生きたいと思っても加齢が邪魔をする。そんな折ＮＢＡがスタート。ステファン・加齢、加齢・トンプソンがんばれ。

１・読書から

◆「教育とは、そこにいる人を愛する力。研究する姿勢」〈ラグビー大西鉄之祐・『コーチングクリニック』〉

バスケットボールコーチもまさに同じ。コーチに反抗する選手、やる気のない選手も愛することができるか。負けがこみ、チームが思うようにいかなくても、子どもたちを少しでも向上させるために寸暇を惜しんで勉強できるか。コーチの真価が問われるところだ。

◆「言葉で理解できる人とできない人がいるのは当たり前で、最初から言葉では伝わりにくいものと思っていればなんでもない」〈シンクロ井村雅代・『コーチングクリニック』〉

名将井村氏が中国人をコーチしていた時の言葉である。今ミニバスケットボールの指導をしている時に痛感することである。難しいことを簡単に、簡単なことを面白く。

２・新聞等のコラム

◆「膨大な情報に惑わされずに、自分にとっておもしろいことを大事にし、人と違うことを恐れないでほしい」〈朝日新聞・文化勲章喜びの声・ノーベル賞大隅良典さん〉

インターネットには膨大なバスケットボール情報が。どれもこれもすばらしい内容であるが、参考にするのは自分自身の感性に基づいて信じることができるもののみ。最後は自分自身が面白いなあと感じることができるようにオリジナルを創造する。

◆「鎖の強さはいちばん弱い環で決まるのだ」〈朝日新聞折々のことば、ギルバート・Ｋ・チェスタトン〉

チームも同じ。一番弱い所からチームプレイが崩れ、チームワークが崩壊する。チームが向上するのは強みによるところが多いかもしれないが、チームがだめになるのは弱いところから徐々に始まってくる。弱い部分、弱い選手にも常に目配り、気配りしたい。

◆「恥ずかしさとは、表現の稚拙さではなく、これが小説だと思い込んでいる世界の狭さ、せこさに感じるものかもしれません」〈朝日新聞折々のことば、角田光代〉

クリニックを終え充実感で家に帰ってくる。ビールを飲みながら振り返っているうちに、「あれがだめ」「これがだめ」が姿をあらわす。自己満足が自己憐憫に変身するが、翌日からの更なる研修に火がつく。

４・その他

◆「お爺ちゃんと一緒でいいねー！」

コンビニのおばさんから孫に浴びせられた言葉。今まで「お爺ちゃん」「爺爺」と言われたのは孫と家族からだけだったが甘かった。やはり爺になってしまったのだ。冬が来る。